2020年度「豊岡市地方創生戦略会議」　会議録（要旨）

○　開催日時　　2020年10月28日（水）午後１時30分～午後3時00分
○　開催場所　　豊岡市役所　３階　庁議室
○　出席委員　　中貝座長、中嶋副座長、嶋委員、岡本委員、太田委員、永田委員
　　　　　　　　西垣委員、宮崎委員、木村委員、森委員
○　欠席委員　　平田委員、太田垣委員、朝倉委員、高宮委員、古橋委員、橋本委員
　　　　　　　　佐伯委員
○　傍　　聴　　13名

１　開会

２　中貝座長（市長）あいさつ

最近になって地方創生にとって大きな出来事がいくつかありました。一つ目は豊岡演劇祭が無事に終わって、全国的にも非常に高い評価を得ることができました。二つ目として、アイティ問題は大変ご心配いただきましたが、無事に解決しました。それから、専門職大学の認可が正式に下りました。建物は来年の２月には完成するということで、いよいよ４月の開校に向けて着実に進んでいるということです。

ジェンダーギャップの解消を第２期で主要な課題として取り上げてきました。他方で、日本全体のジェンダーギャップの取組みはあまりに遅いということがあって、逆に豊岡市が最近大変な人気者になっています。ある東京の企業が全国で約5.000ある地域再生計画（国の地方創生交付金を申請するための計画）を調べたところ、その中でジェンダーギャップの解消を掲げているのは豊岡市だけだった。いかに日本の地方が人口減少問題とジェンダーギャップとのリンクに気づいていないかということを意味しています。豊岡市も何ができているかというとほとんどないわけですが、少なくとも問題の所在に気づいて、それに対応しようとしているということが今のところ日本では突出した取り組みとして評価されてきていて、最近いろんなところでちやほやされているという状況があります。

今日はそのあたりのまとまった報告をさせていただいて、それを受けて地方創生戦略を若干改定するところがありますので、それについてのご議論をいただき、いつものとおりフリートーキングをさせていただいて、次へとつなげていきたいと思っています。

３　報告事項

⑴　子育て支援の総合拠点整備について

座長：　アイティが出来たのが1997年ですが、以来、㈱さとうが核店舗として頑張ってきてくれました。実質、市が主導した事業です。豊岡の商業機能をはじめとして都市機能を駅前で飛躍的に高めて、豊岡の魅力を高めていこうということでス

タートしました。その際に核店舗が必要だということで、豊岡市が相当誘致をして、結果㈱さとうに来てもらったという経緯があります。実は㈱さとうは今専門職大学を建設している場所に当時最も稼ぎのいい店舗があったのですが、豊岡市のたっての依頼を受けてそちらを閉めて今のアイティに入ってきて、現在まで頑張ってきてくれていました。しかし、開店以来ずっと赤字です。累積赤字が50億円を超えていて、単年度でも2.6億円の赤字だと聞いています。㈱さとうはいろいろなところに店舗を持っていますが、アイティ店はダントツの赤字額です。もう一企業としての努力の限界を超えているということで、このまま事態が改善されないのであれば退店せざるを得ないということでした。しかし、長らく市民に愛顧されてきたということがありますので、何とか残りたいという思いもあると言われていました。そこで、条件について話し合いをしたいという依頼が豊岡市に対してあって、市としても出られてしまうと駅前ビルが幽霊ビルになってしまいますので、その協議を行うことにしました。

（中略）

今後４階をどう活かすかということであります。子育て支援の拠点と発達障害児の療育をしているところからも入りたいと希望があります。それから、高齢者のための施設は元々旧いずたやの跡地に作る計画でしたが、これを急遽変更して４階に持ってくることにしました。これで整備費は6,900万円安くなります。それから、外国籍の方々や女性たちを支援するような機能を持たせられたらなと思っていまして、年内に具体的にどのように利用し何をするかを決めていくことになりますが、できるだけいろいろな方々の知恵を頂いていいものを作っていきたいと考えているところです。

（中略）

次のページが、今大まかに考えている利用の案です。右下の方に生涯学習サロン、高齢の方だけでなくて市民の皆さんのいろいろな活動の場所になります。子育て総合センターが今７階にありますが、一体管理ということで４階に移す考えです。それから、子どもの遊び場であるキッズランド、子ども支援センター、女性就労支援室等があって、実効面積2,200㎡くらいですが、このような構想を立てています。これらを今後具体的に詳細な計画を作っていくということになります。

⑵　第1回豊岡演劇祭について

資料２に基づき説明。

⑶　ジェンダーギャップ解消の取組について

資料３に基づき報告。

⑷　合計特殊出生率について

事務局から報告。

４　協議

⑴　第２期豊岡市地方創生総合戦略の改定について

座長：　説明の中で、特に「スマートコミュニティ」というのは初めて聞かれた方があるかもしれませんので、少しご紹介したいと思います。

世の中ではスマートシティという言い方をします。スマートというのは賢いという意味ですが、要は最先端のテクノロジーで徹底的に便利なまちを作るといったイメージです。豊岡市としてはやらないという方向性を出しています。便利さが人を幸せにするわけではないので、スマートシティは豊岡市としてはやらないことにしています。ただ、豊岡のまちが過疎の疎ですので、非効率というのがやっぱりあって、公共交通機関なども非効率によってなかなか利便性を確保できないといった、疎による非効率が結構あります。その疎による非効率を最新のテクノロジーで補う、先ほどAIを使ったオンデマンドの話をいたしましたが、例えばそういうイメージです。

そのようにして補いながら、この地域の強みであるコミュニティを支えていく。ただ、伝統的なコミュニティというのは得てして縦向きのコミュニティです。昔はそれこそ長老支配で、女・子どもは黙ってろみたいなイメージがどうしても日本中の地方にはある。この縦系列のコミュニティをフラットに横向きにつながるようなコミュニティに変えていこうとしています。コミュニティもスマートにならなければいけないという意味を込めてスマートコミュニティと言っています。

このスマートコミュニティの取組みを、トヨタの財団でありますトヨタモビリティ基金と豊岡市が組んで全面展開しようということにしています。スマートコミュニティ推進機構という組織を作っていまして、私が理事長なのですが、理事はトヨタモビリティ基金の事務局長、もう一人は太田直樹さんという総務大臣アドバイザー、長い間総務大臣補佐官をされていた方ですが、これら３人で理事会を構成しています。市役所２階のエレベーターホールに「B-room」という部屋を作り、そこに関係者が集まってフリートーキングをしながら、豊岡のスマートコミュニティをどう進めるかについて議論し進めていくという、そういう拠点まで作っています。

今トヨタは富士山麓にある工場跡地にゼロからの徹底したスマートシティを作るということをやっていて、それはニュータウンですが、既存の都市をどうするかということについては豊岡をモデルとしてやるということにトヨタの内部では位置付けられています。そういったものを今回この地方創生戦略の中に位

置付けていこうということです。さらに、今日はご説明しませんでしたが、その一環としてAIを使ったオンデマンド交通を市内でできないかという構想が始まろうとしています。実はジェンダーギャップとも関係があります。最近出たレスリー・カーンという人の『フェミニストシティ』という本があります。まだ私は読んでいなくて説明した文章を読んだだけですが、その中にこんなくだりがありました。世界中の都市のモビリティというのは、実は男が作り上げてきている（マンメイド）だと。大体男性の生活のパターンというのは、どんどん郊外に住むようになって都心に仕事に行く。その郊外から都心へかなり長い距離を単純に行って帰るだけということで公共交通が出来上がっている。ところが、家庭にいる女性たちがどういう動きをしているかを調べた人がいます。これはベルリンとウィーンでやられています。そうすると、女性たちの行動パターンは全く違うことが分かりました。女性たちは、短い距離をこまめに動いていて、例えば、子どもを学校に送っていく、病院に連れていく、買い物に行く、友達とおしゃべりをしに行く。そのように、長い距離ではなくて短い距離の中を非常に複雑に動いている。その動きを支えるようなモビリティが実はないということに気付いて、ウィーンはそこを徹底してやっているということがあります。もう一度ジェンダーギャップの観点から都市の構造であるとかモビリティのありようそのものを見直していくべきだという、そういう本だそうです。

AIを使うことで、短い距離をどのようにいろいろなモビリティの資源を使いながら組み合わせて利便性を高めていくかという取り組みが可能になりますので、今そういったことが豊岡市内でできないかという検討に入っています。障害のある人や家庭にいる女性たち、仕事に出ている人たち、子どもたち、高齢者、その中でも自分で車を運転できる人できない人いろんな人たちがいるわけです。その多様な人たちの生活を支えることができるようなモビリティのあり方が、まさに多様なまちを目指そうとしている豊岡にとって不可欠だということで、そのあたりのことをにらみながら今回スマートコミュニティの構想を戦略の中に位置付けていこうというのが、今日提案させていただいている趣旨です。

５　意見交換

座長：　ここからはフリートーキングにしたいと思いますが、ご質問なりご意見でも結構ですので、どなたからでもどうぞ。

副座長：　今回子育ての拠点ということで全体的な用途が決められていて、今日伺った限りでは相当絵ができているような感じですし、予算もきちっとこの範囲内でこのタイムラインで年度内にこれだけお金を使わなくてはということからすると、我々が何をどこまで希望を言っていいのかなというような感じもしています。

実は今日のこのミーティングを迎えるにあたって、子育てに詳しい方と先週１時間ほどZoomでブレーンストーミングをさせていただいて、いろいろなアイデアや知恵をつけてくださったのですが、まず一つは「子育て」ということについて、もう少し我々は柔軟な捉え方をしていいのではないかと。なんとなく子育て拠点というと０歳児から幼稚園児くらいまでかなとか、そういう子どもを持つママさんたちかなとか、我々の固定観念としてすぐ出てきてしまうんですね。でも、もしかしたらもう少し上の年齢まで広げてもいいのかもしれない。

私が相談した方がおっしゃっていたのが、豊岡は専門職大学ができるのだから、それと掛け算するというのも一つありなのではないかと。例えば、子育て支援の拠点の中で提供されているプログラムの企画や運営に、新しくできた大学の学生たちが実習として加わるとか、そこの子どもたちと地元の高校生たちが何か集ってやっているとか、そこまで含めて子育てと捉えてもいいのではないかと。幼い子から大学生くらいまでの活動という捉え方も一つあるでしょうというようなことをおっしゃっていただいたのが、印象に残っていることです。

それから、総合的な拠点にするのか特徴を持ったとがったものにするのか、そこは悩みどころかなと思いました。私が最初に説明した時にはどちらかというとワンストップ型のものと言いましたが、それをやると一つ一つのことが非常に薄く小さくなって、結局全体としてそんなに効果とかインパクトは大きくなくなるよと。行政がやっている当たり前のことをそこでもやっているということに過ぎなくて、それを駅前の一等地のワンフロアを使ってやるのはちょっともったいないのではないですかと言われたりしたので、じゃあ何かほかにもやり方があるのかと聞いたんですね。例えば、今、ツタヤが全国で図書館を次々とプロデュースしていますね。実はそれの子育て版があって、知育玩具のメーカーが大阪の高石市ですとか京都市といったところの子育て拠点の総合プロデュースを請け負っているんですね。その施設やプログラムをデザインすることで、今ものすごく子どもたちや子ども連れの親御さんたちが集まってきていると。ものすごく楽しい知育玩具のテーマパークみたいになっているんです。そうなると、豊岡市内でも旧豊岡市だけではなくて但東の方からも行ってみようかとか、場合によっては隣の養父市や但馬全域からも、「豊岡市の駅前はあんな面白いところがあるらしいよ」という、行く価値のある場所になると思うんですね。そうでなければ、そこにもできたというレベルの行政サービスの追加であれば、おそらく旧豊岡市の中で行きやすいという方しか行かない場所になってしまうのではないのかなと。

地方の駅前というのは中心市街地とか中心商業地と言いますが、おそらく実態としてはもうそうなっていないですよね。豊岡市の中心地というのは豊岡駅の前ではたぶんないと思います。そこにどういう人たちが日頃移動していて、そ

の人たちにどういうものを提供すれば便利なのかというのが、ずいぶんと我々が昔から思っていることとは違ってしまっていると思うんです。例えば神戸市では三宮の再開発を行っていますが、やっぱり今でも鉄道が交通の要ですので、女性の社会進出が進んでくると介護とか子育ての拠点を駅に近い所に寄せていくというのは自然と受け入れられている流れですし、鉄道の運営側もそこはすごく意識してきている。中へ中へと近い所へ作りこんでいくようなまちづくりというのは行われてきています。でも、ちょっと豊岡では高校生くらいしか駅の周辺にはいないと。むしろ、アイティの中にあることによってちょっと車で行きにくいのでなんかいやだと。もうちょっと郊外に作ってくれた方がよかったのにと。そういう意味ではあそこに行く意味をもうちょっと欲しいですね。

ほかの分野では豊岡市は明らかにチャレンジしているなと見るわけですね。演劇で、大学を設置して、ジェンダーでと、地方創生の柱になるような部分で注目してもらえるような取組みやチャレンジがなされている。それに「面白いな」とか「一緒にやろうよ」というような人たちや企業が集まってきてくれている。それをなんとかこの分野でもできないのかなと。もしあの城崎の大会館を同じような子育て支援の拠点にしようと使っていたら、たぶんあの建物を豊岡市が買った意味というのがそんなに強く出ていなかったし注目もされていなかったと思うんです。なので、ここのフロアを買ったということも、５年10年経ってみて「豊岡市は明らかに地方の行政として難しい局面を逆転の発想で勝ったよね」と、「あのときチャレンジしたことがすごくよかったね」と言ってもらえるようなプロジェクトとして使えないのかなという思いです。

座長：　子育ての支援の拠点、特に雨が降っても雪が降っても嵐になったって子どもを遊ばせることのできる場所がないというのが長い間の豊岡の課題でした。構想策定費も予算で認められていますので、その中で具体的に議論していきたいと思っています。

それから、０歳から５歳までということではなくて、今の７階にある子育て総合センターは幼児に限っているものですから小学生が使えない。なので、４階については小学生も中学生も高校生も行けるようなフロアにしたいというのが現在の考え方です。図書館の話が出ましたが、図書館にしてしまうとまた人の配置などが大変なので、本もあるような空間、中学生や高校生がただたむろしているだけでも構わないようなそういう要素も入れようということですので、年齢はもう少し広くとっています。

それから専門職大学との連携や関係は、今後ぜひ検討していきたいと思っています。特に買い物だけ考えても家庭にいる女性が買い物に行くときに、一人で買い物をしたらどれだけ清々するかということがありますが、その間子どもを

どう預けるのか。今の子育て総合センターですとお母さん方が知り合いなので「ちょっと見ててね」といって行けるのですが、例えば有料でも一時預かり所を作ってはどうかとか、あるいは空いている部屋を借りて英会話教室などに有料で入ってもらい、その授業の間に買い物に行けるというようなこともいけるかもしれないと。この辺で学生とのコラボというのはあり得るのではないかと思いますし、それ以外でもあるのかもしれません。ここはまた平田さんともよく相談したいと思います。

それから、とがったものにするのか総合的なものにするのかというのも、今日ご提言いただきましたので、改めて俎上に上げたいと思っています。いずれにしろ現実問題として、とにかく雨の日でも雪の日でも遊べる所が欲しいというのが切実な課題としてありますので、そこでスタートしていく。ただ、もし豊岡が総合的であって、なおかつとがろうとすると、多様な人たちが交わる場所としてとがることができないかというのが可能性として一つあるかなと思っています。高校生まで含めての子どもたち、それから女性、ジェンダーギャップの方からいろいろなアイデアが出てきていますが、女性を支援するような空間、それから障害者の支援、高齢者、外国籍の方々の日本語教育や日本文化を学んでいただくような場であるとか、そういうものをただ並列的に並べるだけではなくて、どう全体的にコーディネートなりマネジメントしてそこから突出したものを作れるかどうかというのが、チャレンジとしては一つの選択肢かなと。ただ、おっしゃったようにある種の単品でとがっていくということも有力な選択肢だと思いますので、いろいろなところの実例を調べながら最終的に何がよりよいものか考えていきたいと思っています。とにかく年内に決めることにしていますが、まだ先ほどのような絵があるだけですので、ぜひいろいろな方々のご意見を頂きたいと思っています。

副座長：　とがることにチャレンジすることの重要性ですが、施設をいかに魅力的にするのかというのも一つですし、おそらくもっと重要なのはその後の企画・運営していく能力だと思うのですが、それが市内であれ市外であれ、一体誰がいかに魅力的でいいプログラムを展開し続けてくれるのかということに相当悩むところだと思うんです。素晴らしいパートナーを見つけて引っ張ってくるときに、それが仮に民間であるとするとよく一つか二つゼロが足りないよと言われるわけですね、行政からの誘いですと。その時に、これは新しいチャレンジで日本ではまだほとんどないと。だからこそ地方での可能性として豊岡でこれを全国初でやってみないかと。そのパートナーとしてあなたを誘っているので儲けをちょっと度外視してくれと言うためにも、戦略的に考えていただきたいと思います。

Ａ委員：　まずやはり豊岡市の経済、中小企業や小規模事業者はまだまだコロナで疲弊をしています。例えば豊岡の特産である鞄産業はまだ３割４割減というところもかなりあるということで、これが年が明けたら元に戻るかというとなかなかそういうわけにはいかなくて非常に厳しい状況が続いています。ほかの製造業等にしても雇用調整助成金をもらって週に１日とか月に４、５回休業されているところもまだあり、非常に厳しい状況です。

いずれにしても若い人や女性が帰ってくるための前提は、やはり経済的な豊かさというか最低限の生活ができるということが必要になりますので、引き続き行政に対してはそのあたりの支援をお願いしたいと思います。ただ、豊岡市は「STAY豊岡」「EAT豊岡」「BUY豊岡」と、非常に速いスピードで支援策を打ち出されましたので、それに対しては経済界としても非常にありがたく思っていますし、今後も長期的にそういう支援をお願いできればと考えています。

二つ目が、先ほども話がありましたがジェンダーギャップ解消の戦略です。前回の会議後とりあえずのスタートをしたというところで、11月に第２回目、12月に第３回目となります。なかなか難しい課題だなと思いますが、ただ、メンバーも若い人から女性、それから外から来られた方など本当に多様性豊かなメンバーが集まっていますので、何とかいい方向に結論を持っていければと思っています。

それから、ワークイノベーション推進会議というのもあります。これは女性が活躍し、女性に帰ってきてもらえるような企業を目指していこうという集まりですが、当初16社だったのが今38社まで増えまして、とりあえず50社を目指そうと言っているのですが、少しずつ同じような思いを共有する企業が豊岡でも増えてきていますので、なんとかこのような輪を拡げていって、女性だけでなく男性も活躍して輝いてもらえるような企業を増やしていきたいと思っています。

三つめが、“国内外から優れた人材が集まり、豊岡の魅力を高めている”というところで、演劇祭のことなどがあります。その中に子どもたちが豊岡で世界と出会う音楽祭という、いわゆる「おんぷの祭典」というのがありますが、今年は残念ながらコロナで６月のイベントが中止になりました。その後もなんとか少しでも子どもたちに音楽が届けられないかと模索してきましたし、委員の中からもなんとか音楽の灯を消さないでほしいという声もありまして、９月に実施しました。10月も先日二日間にわたって稽古堂と市民プラザで子どもたち向けのコンサートをやりました。市民プラザの椅子をどけて広い所に30組ほど親子に集まってもらって、そこでコンサートをしましたし、年内は11月22、23日と12月19、20日にもまた行います。これも稽古堂、日高町の文化体育館とか市民プラザで子ども向け・大人向けのコンサートをやります。

先日、但馬空港にピアノが入りました。空港ピアノです。これは豊岡市民の方

が兵庫県へ寄付をされて、11月23日に但馬空港で空港ピアノのお披露目コンサートをピアニストの碓井さんが行いますので、皆さんにお越しいただきたいと思います。12月５日には空港ピアノをいろいろな方に弾いていただこうというイベントを但馬空港と一緒にやることも考えていますので、演劇ももちろん来年に向けて進めていくと思いますが、音楽の方もこのような形で活動していますので、来年の６月に向けて「おんぷの祭典」の方も準備していきたいと思っています。

座長：　コロナ対策の経済関係の方は、「STAY豊岡」「EAT豊岡」「BUY豊岡」で直接の経済効果が約９億円と見ています。「EAT豊岡」はまだ券を使っていない方がいますので全部使われたらという前提ですが、全部使われると５億2,000万円がそのまま消費に変わるわけですね。ということは、含めて約９億円の直接的な経済効果があるとみています。

今は国の「Go Toトラベル」で賑わっていますので、豊岡市としてももう少し様子を見たうえで、国の支援がなくなったときに豊岡の状況がどうなのかを見て、そこに間髪入れずに対応するという姿勢で、今は状況を見ているというのが実態です。

ただ、製造業にはほとんど手を付けていませんでしたので、コロナ対策で製造業の新たな投資に対する補助制度というのを作りましたが、これが最初は6,000万円だったのですがとんでもない数の応募がありましたので、ついこの間議会に補正をお願いして5,000万円追加して、1億1,000万円の補助制度を設けています。こういった中でもなお挑戦しようとする製造業の企業がたくさんあったということは大変喜んでいまして、これからもそのあたりは幅広く状況を見ながら対応していきたいと思います。

それからジェンダーギャップの方はかなり注目されるようになってきましたので、これは豊岡にとってはとてもいいと思っています。なんとなく豊岡がジェンダーギャップを解消しようとしているというのが市民の中にもじわっと伝わっていくし、褒められると人間というのはうれしくなってもっと頑張ろうという気になって、担当者も燃えていますので、これは大きな原動力になるのではないかなと。豊岡の企業の中で賛同いただける企業が急速に伸びているというのも大変心強いことだなと思っています。

「おんぷの祭典」の学校公演はちょっと残念でした。ただ、「THEATER豊岡」の方で実はいっぱい学校に入っています。平田さんの劇団も、それからこの間終わりましたが「to R mansion」というパフォーマンス集団も29の小学校すべて回っています。それを見ると一流の音楽家が学校に行って演奏することに何の問題があったのだろうと今は思います。おそらく当時としては保護者がまだ不安感

が非常に大きくて実現に至らなかったのだろうと思いますが、今の劇団の動きとか実際「THEATER豊岡」を見ていると、むしろこんな時こそ音楽を子どもたちに届けてやれたらなと私も思います。

Ｂ委員：　今の続きですが、演劇祭が終わってからわずかな変化が見られます。「to R mansion」という４人のグループの一人に豊岡市出身者がいます。その先輩が小学校をずっと回っていて、小学生たちは初めて見るような大道芸パフォーマンスを見ている。中学校では、すでに豊岡市に引っ越されましたが知念大地さんという大道芸でヨーロッパの至るところを回られた方が入って、表現とは何かということを訴えかけたんですね。今まで上手にお座りをして見ていたのが、そうではなくて演者もいろいろ動き回るし、それから見たこともないような、例えば体育館の狭い戸口から外に出てみるとか、それもすべて表現なんだと。ずっと寝ているという表現もある。そんなことをやると子どもたちが感想で書いたのが、「私は今３年生の受験期で大変なことばかりだが、なんだか自由に生きられそうな気がするし、生きてもいいんだ」という感想を書いたり、「表現っていろいろあるんだな」という感想を持ったりしています。

それから、就学前の幼稚園・保育園では、平田さんの「ちっちゃい姫とハカルン博士」という20分くらいの書下ろしですが、それは測るってどんなこと、大きい小さいってどんなこと、長い短いってどんなことというのが起点になっているのですが、最終的なテーマとしては小さくてもいいんだという、豊岡の目指すべき姿ですが、それが隠れテーマにあるということです。

幼稚園でも保育園でも、小学校でも中学校でもみんな当たり前に今までは見なかった表現を目の当たりにすることができているという、そこが少しずつ何か文化的なものを醸し出しているような気がします。

次の話ですが、演劇祭に何とか中学生がすべてではなくても関与できないかと考えています。豊岡市の今最も特徴的な教育プログラムが「Local & Global学習」といって、ふるさと教育と英語とコミュニケーションを９年間通してやります。“自分の言葉で英語を使いながら自分の住んでいる豊岡の人やことや物について堂々と語れる子どもを作ろう”というイメージです。演劇祭には70%が豊岡市外から来ています。こちらから出かけなくてもいろいろな人たちが来てくれているので、その人たちを対象に自分が学習したことをアウトプットする場にする可能性が出てきたということです。今日さっそく校長会があったので、どんなことを自分の学校はふるさと教育として子どもたちが学習し、どんなことをどの場所でアウトプットできるのか、それに演劇祭を使えないだろうかということを問題提起しましたので、少しずつ演劇祭にも関与していきたいと思います。それから、もう一つ最新情報で、これも豊岡出身のミュージシャンでキーボ

ード奏者ですが、AKB48や太田裕美の編曲にも関わっている浮田学さんという人です。その方がいよいよ豊岡に居住地を移します。ウェブ上でいくらでも仕事はできるということで帰ってこられることになって、せっかくここに育ててもらったので、学校で希望があるところはすべて回りたいと。自分がなぜ音楽をしているのかや自分のやっている演奏を聴いてほしい、授業でも放課後でも休み時間いいからやりたいと。今はまだ点ですがそういう動きが少しずつ出てきていて、そんな中で正確に今あることを学ぶという教育から、豊かに学んでくれるとか広く学んでくれるとか、そういう環境がもし豊岡の売りになるのであればすごくうれしいなと思って、これからのことを楽しみに思っています。

Ｃ委員：　委員の発言にあったように、製造業はまだお仕事が少ないというのを聞いてちょっと思ったのですが、宿泊業はご存じのように「Go Toトラベル」で宿泊業バブルといいますか、１月の入込だと昨年の10倍くらいのスピードで、「私、年を越せるんだろうか」というくらい完全に人手不足なんです。そこに上手に市が介入して人のシェアをできたらいいなとちょっと思いました。１月末まで、城崎でも派遣を頼んでも人が回ってこないと。城崎でも回ってこないのに竹野は一人もスタッフを確保できていなくて、４人で30人のお客さんを何か月、回していけるのかなという本当にちょっと怖い状況です。休みを取れる日はどんどん取っていかないと体がもたないな、スタッフが辞めちゃうなというような状況になっています。ありがたいといえばありがたいのですが、ちょっと怖い年越しになりそうだなというような状況です。

　平日も同じ状態です。11月は全部埋まってしまって、カニが来るまでの10月は普段の年なら一番のオフシーズンと思ってのびのびしているのですが、今も毎日お客様が続いているので、ちょっとカニに切り替えができないなと。活ガニが足りるんだろうかというので、漁協の方にも旅館から頼みに行ったようですが、たぶん量が確保できないとか価格崩壊を起こしてしまうのではないかというのをすごく今危惧している状況です。

　子育て支援の拠点ですが、うちも一番下の子が今年小学校に入ったので、なんとなく関係のない話になったと思ってしまっていました。竹野の小学生や中学生はほぼ豊岡に来ることはないので、アイティは関係ないなとかちょっと思ってしまっていて、先ほどおっしゃったように小学生や中学生も集えるような仕組みがあって、わざわざ竹野から豊岡まで来ても意味がある場所になってくれたら使えるかなと。私も高校生の時は１時間から１時間半に１本しかない各駅停車を待つのに駅周辺や旧さとうにはだいぶお世話になったので、そういう場としては必要なところだなと思います。

　それでちょっと思ったのが、学校が統合したからといって増えるのは学年で

２～４人程度なんです。もう一つ、別の小学校と統合しても20人超すかなくらいの人数で、じゃあ10年後どうなるのかといったらまた１桁、２桁というのが見えている状況で、過疎とか少子化が進んでいるから無理やり統合しているという構図をなんとかやめてほしいなと。なんかもっととがった、「豊岡市はもう学校を一つにして『豊岡学園』一つでこういう教育をしていきます」みたいなのがあれば、「魅力的でいいわね、あのまち」みたいな感じでみなさん引っ越してきちゃったりもするのかなと思ったりします。もちろん通学の距離とか諸々あると思いますが、夢を持って統合していきたいなという思いです。

「おんぷの祭典」は子どもたちもすごく楽しみにしていて、家に帰ったら必ず感想も言ってくれるのでありがたい企画だと思っています。

Ｄ委員： 演劇祭のことなのですが、フリンジの出演者の方の宣伝をさせていただいて、すごく親近感も沸いて実際に見に行かせていただきました。それは夜９時から江原河畔劇場の横のワークピア日高というところで始まったのですが、豊岡で９時から演劇が見られるということですごくワクワクして、普段ならすべてが終わりの時間なのですが本当に満席でした。わざわざ席も取っていただいていて、なおさら親近感が沸いて来年も続けて見に行こうと思っています。

一つ残念だったのが、終わりの時間が伸びて豊岡に帰る方が江原駅で電車を逃して１時間待たないといけなかったと。その１時間を江原駅のホームにいた十数人の方々は楽しまれたのかどうか。田舎では待つということがどうしてもあるので、待つ楽しさというのも公共交通機関を楽しむ術として一つあってもいいのかなと。便利さだけを追求するのではなくて、不便さを楽しむという豊岡らしさ、とがるではないですがそういうこともあっていいのではないかと。

もう一つ思ったのが、親近感を持つことで来年も、ということです。ソフトボールの大会が但馬ドームで行われているときに、そのチームを地域で応援するというシステムがあるのですが、それがすごく皆さん楽しそうなんですね。なんかこの地区がこのチーム担当とか現地を案内するとか、もうちょっとふれあえる体制が整えばいいなと。例えば、城崎に移住してきて車を持っていない方が全然不便を感じませんとおっしゃっていたのを思い出して、なぜですかと聞くと誰かが乗せてくれるからと。この地域はすごいとおっしゃっていたのを思い出して、そういうふれあいを楽しみながら交通手段を楽しめるというのも一つの豊岡らしさにつながるのかなと思いました。

あと、今日の資料で“今の日本で、あなたの娘は輝けますか？”とありますが、これを“豊岡で”に置き換えて今ちょっと考えてみました。中二の娘はどうだろうと。とにかく田舎は働き方の選択肢が少ない感じですが、リモートで選択肢は増えてきていて暮らし方にとってはそんなに都会と差はないかなと思っていて、

働き方の提案がもう少し上手く親としてもできれば、豊岡で輝ける女性が増えてくるのかなと思います。

お母さんたちといろいろ話す機会があって、とにかく何がストレスかというと、子どもがストレスを抱えることが親のストレスにつながっていくんだなと。やはり子どものストレスを減らす術というものを真剣に考えないといけないと思いました。その一つとして、コロナで孤立した親をいかにケアしたかということで子育て総合センターの話がよく挙がったのですが、やはり電話一本ですごく救われたお母さんたちがいたということで、実際に足を運ぶだけではなくてそういう拠点があるということがすごく強みだなと思いました。アイティの４階の話は、やはり雪国を知っている方と知らない方の違いが出たのかなと思ったのですが、屋根がないところではちょっと滞在して戻ったら車に入るのに雪かきから始めないといけないと。子どもを連れながら車の屋根の雪を取るというのは一苦労だと思いますので、そういうことがないというところもすごくいい点だなと思っています。

あと、オリンピック選手が豊岡に帰ってこられるという話が出たりしていますので、そういった有名な方がどんどん帰ってくる豊岡というのはすごく認められてきているのかなと思っています。

Ｅ委員： 文化・教育は本当に素晴らしい経過をたどっているなといつも喜んで聞かせていただいています。演劇祭の中ではやはりまちづくりのための実証実験、モビリティのところにすごく期待というか注目していまして、福祉分野でも移動とかが一番ネックになるんですね。障害者が働こうとしても交通手段がないとか、この範囲でしか動けないとかそういうこともありますし。これがICTでいろいろな情報は入っても物理的に動ける若い人材というのが育っていくのかなと。社会の下支え的な人材がちゃんとこれから確保できていくのかなとすごく気になっています。移動の手段もそうですし、介護・福祉人材もやはり若い世代が安心して働き続けるためにも絶対ある程度の数をしっかり確保していかないといけないと思うのですが、なかなかそこが回っていかない。旅館もそうですが福祉もすでに人材は不足していて、そういう地域内で融通しあうとか移動していくというのもいいですし、外からくる方にも豊岡で輝く生き方だけではなくて、そういう社会の下支えとして、穏やかに暮らしていきながらみんなで支えていくという実感を持ちながら働いて生きていける社会なんだとアピールすることで移住してもらうとか、そういうのも大切ではないかなと思っています。ぜひそちらの方も気にかけていただけるとありがたいです。

Ｆ委員： 私はまだ子どもがいなくてこれから考えるのですが、アイティに子育て支援拠

点を作っていただくのは安心するなと思っています。まず子育てに対してまだどうしていいのか恐怖感があって、その中でこういった場所ができるということと、子育てをされている方からいろいろ話を聞いていると、子育てをしない時間が欲しいということを聞きます。この子育てを支援してくれる場所に行くと自分は何もしなくていい。しないわけではないけど、ちょっと子どものことから離れられる時間ができる場所ができたらうれしいなと思います。

この近くで宿をやっていますが、小さいゲストハウスなので単身の旅行者の方が多いのですが、今回演劇祭に向けて神鍋の方がかなり多く来られました。1階の食堂の方にはスタッフの方とかが来られたので、見る側と実行する側の両方に来ていただいたのですが、せっかくこういう場所に来たので地元とつながったりしたいという声を多く聞きました。さすがにコロナの時期だったので、外から来た方が豊岡と深く関わっていいのかというので皆さん遠慮されていましたが。地元の方ともお話をしていたら演劇祭のことを知らない人も多くて、城崎でタクシーに乗った方が演劇祭のことを聞いたら「なんのことですか？」と言われたと。来られる方は関わりたいと思っているけど地元自体にはあまり認知されていないということがあったので、むしろ逆輸入的にどんどん外の方に演劇祭の面白さを伝えてもらえたら、地元の人ももっと協力的になるのかなと。

それで演劇祭が終わってからいろいろなお店の方と話していたら、最初はやはりちょっと否定的な気持ちだったが、コロナの時期にお客さんも少ない中で来ていただいてすごくよかったと言ってもらえたので、やってもらってよかったという声も聞きました。

あとちょっと面白かったのが、地域の回覧板が回ってきますが、それまで１枚か２枚しか挟まっていなかった案内が、演劇祭が終わってから10枚くらいになって、なんだろうと思ったらイベントがダッと入ったんですね。なんか「演劇祭が大丈夫だったし、いいんだろうか」ということでみなさん動き出したのか、演劇祭の効果があったのかなと思います。

モビリティの件なんですが、地元の方々は乗り合いをしているというのがあったので、そういった形で地元の方とか旅行者とかがお互いの好意で動けるような、そんなモビリティもあったらいいなと思いました。

Ｇ委員：　アイティの４階に子育ての拠点ができそうだという新聞報道がされたときに、お母さん方が大きい子どもたちが天候に関係なく行ける場所ができるということですごくうれしいと。だけど、それは静かな感じで私たちに伝わっていたんですね。ところが、それが否決されたという報道がされるようになってからは、当たり前のようにあると思っていたものがなくなるかもしれないという不安が一気に広がっていくのを感じました。それは７階の子育て総合センターもそうで

すし、アイティという場所もそうですし、あのビルはある一定の年齢の方にとっては子どもを連れながらそこですべてを済ますことができる場所だったんです。ある程度子どもが大きくなったらいろいろな場所に出ていけるのですが、小さい子どもを抱える親御さんにとって、一つの場所でいろいろなことを済ませられて子どもも遊ばせることができるという場所が、ずっとあるものだと思っていたけどもしかしたらなくなるかもしれない。最初は半信半疑で、「いや、さとうは撤退しないでしょう」「総合センターが続かないなんてことはないでしょう」という方が大半だったのですが、でもそうじゃないかもしれないという中で広がっていったのが不安でした。さっき委員が子育てへの安心ということを言われましたが、やはり子育てをする人たちにとって安心する場がきちんとあるがすごく大事なことだなと。私たちが顔を見たことがないお母さんたちまでもが９月の連休から末までにかけて署名運動をどんどん進めていかれたのですが、総合センターにも男性からも「どこにどう言ったらいいんですか」「なにができるんでしょうか」と電話がかかってきたりしました。実際に総合センターを利用されるのは豊岡の方だけではなくて、京都とか養父や朝来や、あと旅行に来られた方が子どもを遊ばせる場所がないのでネットで調べて来たりということで、結構豊岡以外の方が利用されることが土日祝日は多いんですね。そういういろいろな方々から声を届けていただくという経験をしてきた中で、安心という場所に私たちはいるんだなと改めて感じました。

その後決まってからは、希望とか期待とかお母さんたちの夢とかいろいろと聞かせてもらいたいと私たちも思っています。あとのことはきっと担当の方が素晴らしいものを作っていただけると思っています。

Ｈ委員：　私もアイティは必要だなと思っていて、利用させてもらった卒業生の親として、本当に小学生くらいまで兄弟で使えるような場所にしてほしいなと思いました。でも今お話を聞いていて、知育玩具のレゴやツタヤが入っている話は本当にすごく魅力的で、ものすごくとがったものにすることで大きな起爆剤になるなとも思いました。実際にあの場所が子育てに必要だというのもよくわかるのですが、すごく魅力的なものにするためのプロデュースにも力を入れてやってもらいたいなと思いました。

あと、演劇祭は私も行かせてもらって、すごくよかったです。こんなところでこんなにクオリティの高いものを見せていただけたのは楽しかったですし、もっとやってほしいなとも思いました。今ちょうど「Go Toトラベル」と入れ違いになってしまいましたが、これがかぶっていたらもっと来ていただろうなとも思いますし、演劇だけではなく音楽のイベントももっとこれを皮切りに増やしていってほしいなと思います。本当に空港ピアノというのも魅力的ですし、音楽

のイベントは減ったままでそのままになっているかなという感じがしますので。
　ジェンダーギャップのことですが、これは具体的な数値とか施策とかはまだ出てきていないんでしょうか？そのあたりがもうちょっと見えてこないかなと思いました。

座長：　豊岡のジェンダーギャップに関するいろいろな調査などは戦略の前提としてまとまりつつありますので、戦略の議論の中でしっかりと公表させていただきたいと思っています。課題は把握しながらも全体としてなんとなく明るい感じの話が多かったかなと思いますので、今日は市の担当職員が来ていますので、しっかり受け止めて前に進めてもらうようにお願いしておきたいと思います。
　それと一点だけ。今日は総合戦略を変えることについてこうしたいということを事務局から申し上げましたが、特にご意見はありませんね。では、そのようなことで。多少文書は変わるかもしれませんが、この方向で改定したいと思います。どうもありがとうございました。

６　閉会